平塚らいてうの会ニュース

発　行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5Ｆ
TEL・FAX
03-3818-8626

（総会報告）「コロナの時代」乗り越え〝没後50年〟を展望

会長　米田佐代子

５月30日、第21回通常総会を開催しました。新型コロナウイルス対策に配慮した会議となりましたが、多くの委任状をいただいて総会は成立、すべての議事を終了したことをご報告いたします。

会の活動については、19年度にらいてうの家の大改修工事をみなさまの多大なご寄付によって無事に終了できたこと、新婦人協会発足１００年記念イベントを主婦連・市川房枝記念会などの諸団体と共同して成功を収めたことなどの成果を確認し、20年度にはこの成果を引き継いでらいてうのこころざしを活かす活動に取り組むとともに、「より多くの方にらいてうを知っていただく」ことをめざし、21年の「らいてう没後50年」記念につないでいく方向を確認しました。

５月30日、新日本婦人の会中央本部

ただし今年度については「コロナ」による「緊急事態宣言」をうけて、４月に予定していたらいてうの家オープンを７月４日に延期、「らいてう忌」や「森のめぐみ講座」７月の「らいてう講座」などの行事も中止を余儀なくされています。７月以降のらいてうの家の運営についても検討しましたが、「困難はあるが、『コロナ』で露呈した人類史的危機に対し、らいてうの『平和と協同』をねがう生き方を学びつつ現実に立ち向かう活動の場をなくすことはできない」という立場から、できる形でオープンすることにしました。９月28日予定の小森陽一さん講演会（上田市）はぜひ成功させたいと思います。

なお、「没後50年」企画については、かつてらいてうが「協同心こそ人類共通の本能」と言ったことを思い出し、「コロナの時代」ともいわれる現代にあって噴出してきた人種差別問題や大企業の利益優先から生まれた貧困・格差を克服し、「核戦争」の危機を乗り越える平和世界への展望を見出す方向で検討したいと思います。

最後に、会の財政は会員の会費ではまかなうことができず、会員のボランティアおよびこれまでも多くの方がたからのご寄付と「家」オープン以前からを含めて積み立てて来た「基金」の運用によってかろうじて成り立ってきたこと、会員の高齢化にともなう活動上の困難も解消されていないこと、今後のらいてうの会とらいてうの家の活動をどう発展させるかが大きな課題だということも率直に申し上げます。どんな困難に出会っても失望しなかったらいてうの灯を灯し続けるために、みなさまからのいっそうのお力添えをお願い申し上げる次第です。

今年度役員

会長・米田佐代子　**副会長**・井上美穂子、折井美耶子、沓掛美知子、小林明子、堀江ゆり、三留弥生　**事務局長**・金輪きみ子　**理事**・青木俊子、飯村しのぶ、植草充代、北澤有希子、木村見江、久野泉、倉橋純子、小林典子、竹花みい子、宮下昌子、山田繁子、若尾伸子　**監事**・佐久間由美子、由比ヶ濱直子

『紀要　第13号』　8月発行予定　頒価700円

「コロナの時代」を生きる人間の力
―21年平塚らいてう没後50年を前に考える―　米田佐代子

特集　記録　新婦人協会発足100年記念のつどい

主催者挨拶　米田佐代子
基調報告
「女性たちが社会を動かし、法律を変えた――
#Me Too #With You につながる100年前の運動」　折井美耶子
トーク
◎らいてうの家族／新婦人協会時代　奥村直史　平塚らいてう孫
◎賀川ハルのキャリア形成とリカレント
冨澤康子　賀川ハル研究会・賀川ハル孫
◎奥むめお　常に女性の暮らしの困難さに寄りそう運動家
河村真紀子　主婦連合会・奥むめお孫
◎市川房枝が遺したもの、受け継ぐもの
久保公子　市川房枝記念会理事長・元市川房枝参議院議員秘書

ご挨拶

上田真田平塚らいてうの会　会長　沓掛美知子

長年に亘り会長をされた花岡静枝さん、杉山洋子さんに代わって、会長をすることになりました沓掛美知子です。微力ではございますが、精一杯やらせていただきます。今年度から上田、真田らいてうの会は、一つになりました。

花岡さん、杉山さんは、この平塚らいてうの会発足当初からご尽力頂き、家の建築、記念事業、らいてうの森の整備等数々の活動を精力的にされ、今の歴史を造られました。ご苦労は如何ばかりかと思います。そんな後を引き継ぐ事は、私にとっては大役ではありますが、皆さんのお力を頂いて何とかやっていこうと思います。お二人には顧問として助言を頂き、新しい役員八名で会の発展に努めて参ります。また、理事として、会にご尽力頂いた藤原美津子さん、富松裕子さんお二人もまだまだ貢献して頂けるとの心強いお言葉を頂いております。どうぞ宜しくお願い致します。

学びと交流の20年

元真田らいてうの会　花岡静枝

２０００年の春まだ浅い3月30日　小林登美枝先生、折井先生、小林明子さんをお招きして「平塚らいてうを語る」の講演会を開催。その後、四阿山高原の建設予定地をご案内しました。雑木林にチラチラ降る春の雪に富美枝先生は「何と美しい。らいてうの魂が舞い降りるわ」とおっしゃったのを思い出します。

それから20年、「我が町にらいてうさんの家、建設を」という熱い気持ちで会員の方々と一緒に真田中の一軒一軒にご寄付をお願いしました。

開館してからの、全国からの来館者との交流やらいてう講座は沢山の学びの場になりました。戦中に怖い経験を致し、平和の尊さ、命の大切さが身にしみている私は、「女性の活動は平和運動につきる」との思いを強くしました。

こども祭りのイベントでは紙芝居、合唱、韮煎餅作りなどを開催しました。並べた案山子を来館者が辿っていくとらいてうの家に着くというしかけをして楽しんでいただいたこともあります。

らいてうの家の周りは自然がいっぱい。山野草、鳥のさえずり、季節が参りますと吾亦紅が咲きます。

らいてうがおりたつ庭吾亦紅

地元「平塚らいてうの会」の発展を!!

元上田らいてうの会　杉山洋子

「あずまや高原にらいてうさんの土地があるから会員有志で見に行きます。そのバスに上田駅から乗ってください。」という折井美耶子さんの電話に誘われて上田駅から参加したのが私と藤原美津子さん。（２０００年6月であった）

「らいてうさんのお家を作るのなら上田の人たちにらいてうのことを知っていただかなければ…」ということで急遽作った「上田平塚らいてうの会」。とりあえず「らいてうからのメッセージ」の読書会を始めたところ20人、30人、40人と会員が増えていき、まず建設資金集めから始まった活動も06年5月からは家の維持活動となり、いつの間にか20年。家も築後15周年を迎えた。ここで富松さん、藤原さん、花岡さん、杉山の4人が退任し、新しく「上田真田平塚らいてうの会」として再出発。これからも女性の学習と憩いの場として発展されることを願います。

朝ドラ「エール」にらいてうの名が

4月7日放映の「エール」を見ていたらヒロイン音の父が「元始女性は太陽であったか。うちの太陽はやかましいのう」と言い、手にしていた新聞がアップになりました。「『元始女性は太陽であった』の平塚らいてうは語る　法改正成立は一つのきっかけに過ぎない」

大正のこの頃「平塚らいてう」の影響力は大きくお父さんもよく知っている人物で、治安警察法改正も新聞に掲載されるほど注目されていたのだと思いました。昨年、新婦人協会発足１００年の記念イベントを開いたこともあり、らいてうを取り上げてくれたＮＨＫへ感謝の手紙を送りました。

この新聞が読みたく、ＮＨＫに問い合わせましたら、「実際の新聞ではなくドラマのために

博史が訪ねた頃の四阿高原（牧場）

昭和30年代後半の北信牧場（『菅平高原誌』より）

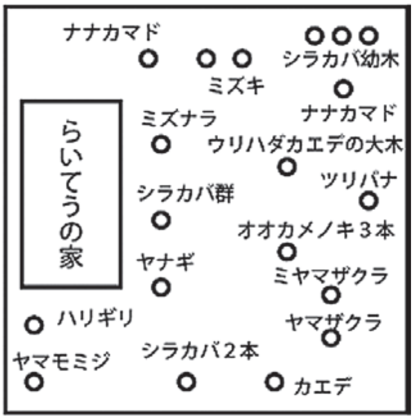
１８８３年（明治16年）菅平の官有原野を借りて牛を放牧したのが牧場の始まりです。それまで上高井郡豊丘村の乳山牧場（破風高原）が中心だったのですが、規模拡大のためと、この地が暖斜地で幼年期の谷は牛の水呑み場として好適地であったからです。１８９９年（明治32年）北信育牛馬組合と改称し、およそ１５９５haの面積と１７００頭の牛を有していました。牛の放牧は明治中期から大正初期が全盛期でその後放牧頭数は大幅に減少します。

この写真の頃１９５５年には牛は９００頭ぐらいです　奥村博史もこの頃訪れていたことでしょう。この風景を見ながららいてうに7通のハガキを送っています。ハガキには「高原の美しさ清々しさを満喫」「(花の）色が素晴らしく、上がってくる時にウグイスがしきりに鳴いていた」と記してあります。うぐいすの鳴く季節だと足許にはアズマギク・フデリンドウ・オキナグサ・スズランなど咲き出しているのではないでしょうか。それらを愛でながら広々とした高原に佇んで手をいっぱい広げて開放感に浸っている博史の姿が目に浮かびます。時を同じくして１９５７年四阿高原を所有する東京のホテル経営者が無償で土地を解放し、国籍や宗教を問わず様々な人々が集まる平和村を作ろうと新聞に報じられます。らいてうもこの構想に共鳴し、自然の中に身を置きたい気持ちとあいまって、この地に小さな家を建てたいという思いに至ったのかもしれません。

「家」にある木　どんな木？

家の南側を中心に赤松以外の木を5月17日に調べました。この図は正確な位置ではありません。こんな木があるのだとわかるためのものです。

特徴的だったのはウリハダカエデの大木があったことです。又、笹を刈ったところにはシラカバが真っ先に出てきていたことです。今回伐採した赤松の年輪を見ると60年以上経っています。丁度らいてうがこの土地を購入した頃には、この木は小さな幼木としてあったということです。そのことから、ここがまだ牧場の裾野の草原で赤松の幼木がちらほらあった風景だということが想像できます。



（倉橋純子）

作ったものです」とのこと。そして、「ヒロイン音が太陽のように周囲を明るく元気づけていく役であることを分かりやすく伝えるために『元始女性は太陽であった』の言葉を引用」「らいてうのこの言葉が出てから10年以上経過している時期なので、唐突で不自然に見えないように新聞掲載を読む演出にした」「当時の話題としてありそうな治安警察法改正を用いて記事にした」そうです。

いろいろ考えて小道具としての新聞を作ってくださったことに感激しました。「法改正は一つのきっかけに過ぎない」―らいてうさんが語りそうな言葉です。今も女性の立場は弱い。ジェンダーギャップ指数の低い日本です。今の私たちへの「エール」だと思いました。

一方、この新聞が１９２３（大正12）年9月27日発行を想定していることに違和感を覚えました。この年9月1日に関東大震災が起きています。音が住んでいた名古屋圏であっても、その月の27日にこの内容の記事を掲載するでしょうか。この頃の新聞は大震災一色ではないでしょうか。

らいてうは、女性救護活動としてはもっとも早く9月24日に中條百合子ら9人で災害救済婦人団を結成し、活動を始めています。らいてうが語るならば災害救済婦人団のことでしょう。

歴史的蓋然性を正確に伝えるドラマづくりは難しいことだと思いつつ、太陽かららいてう、治安警察法改正へとつなげてくださったＮＨＫの方々に感謝いたします。

（金輪きみ子）

シリーズ（新婦人協会の人びと）№５

田中　芳子

田中芳子は、一九二〇年一月六日新婦人協会最初の会合に出席している。

芳子が協会に入会した動機は、一九年二月小学校の教科書についての講演会を聞きにいったところ、警官から「婦人は・・」と追い出されてしまった。「子どもの教科書のことも母親が話を聞くことさえできないとは」とその不当さに憤慨した。当時この文部省主催の講演会は、政談演説として取り扱われており、親でも女性は入場できなかった。そんなとき、らいてうからの入会の誘いを受けて早速入ったと、のちに芳子は語っている。

芳子は田中林太郎・峰千代の三人姉妹の長女として生まれた。「からくり儀右衛門」として知られる田中久重は、芳子の曽祖父に当たるという。芳子五歳のとき、藤山不二は田中家の養子となり、長じてのち二人は結婚、四男一女を儲けた。

不二は一高、東大と進学し、のち三年間ヨーロッパに留学した。留学期間はちょうどイギリスで婦人参政権運動が盛んだったころで、女性たちの活動を目の当たりにして帰国。「もっと婦人がしっかり発言しなければ」と芳子を励まし援助した。

芳子は、協会のなかでも目立たない会計や会計監査を引き受けて活躍した。「婦人には未だに独立した財産権が殆どないのですから婦人運動の永続が中々むづかしいのです」と述べ、民法上女性には財産権がないことが、人間関係をときには難しくし、運動の継続を困難にしていると冷静に分析している。

協会解散後は、婦人参政権獲得期成同盟会創立によって中央委員として財務部を担当し、婦選獲得同盟では、第六回まで中央委員を務めている。関東大震災に際して成立した東京連合婦人会でも活躍し、母性保護法制定促進婦人同盟では副委員長となっている。また一九四〇年から五五年までは、家庭裁判所調停委員も務めている。

その間、夫不二から「子ども四人を一生懸命育てたなら、本の一冊位は書けるでしょう」と勧められた。躊躇していたが「そんな事では婦人問題の前途もまことに心細い」などと励まされ本の準備に取りかかったところ、関東大震災にあい原稿の一部などが燃えてしまったという。しかし二二年病弱だった夫不二が早世したのち奮起して二五年に出版した本が『親こゝろ子こゝろ』である。この本は、母親や主婦向けに書かれたもので、女性にとっての自立と母親の子育ての権利を謳った本として当時の女性に大きな影響を与えた。

一九六一年一一月、婦選会館地鎮祭後の婦選同窓会の席で、「先頃・田中芳子さんが会館の寄附を届けられ、建設予定地に十分余りも立ちつくして帰られ」たというエピソードが披露された。その直後の一九六一年一二月八日、芳子は八一歳で永眠した。

（折井美耶子）

【事務局日誌】

5月13日　２０１９年度会計監査を受ける
5月14日　第７回理事会
　新型コロナ感染症の影響で中止
5月30日　第21回通常総会（於新婦人中央本部会議室）
　第１回理事会
6月26日　会ニュース第１１０号発送

◎新型コロナウイルス感染防止のため、らいてうの家は4月～6月休館していましたので今回の「家通信」は休刊です。

◎**２０２０年度の会費、ご寄付**などのご送金をお願いいたします。

◎**小森陽一さん同行信州の旅　9月26日～28日**

26日　松本猛さんと対談（ちひろ美術館）
27日　小森陽一講演会（上田市中央公民館）
28日　らいてうの家
　窪島誠一郎さんと対談（無言館）

実施内容について等の問い合わせ・申し込みは「たびせん・つなぐ」へ
03・5577・6300

台風などに備えて家の周りの木々を伐採しました。